

ジュリア・クリステヴァにおける 「抑圧」と「聖なるもの」

齋藤 喬

本発表は、「恐怖」に焦点化した宗教研究の文脈において、『ホラーの諸力』(一九八〇)のジュリア・クリステヴァが提示した恐怖症の原理とも言える唾棄物(abjection)の概念から、そこで導入される「聖なるもの」(sacré) 顕現のあり方を確認し、それが現代社会における宗教的な「恐怖」の体験となる可能性を検討する。このような言い方には、前提として宗教的な「畏怖」を自然の恐怖以上の「恐怖」であるとした『聖なるもの』のルードルフ・オットーの議論がある。精神分析の用語と概念を駆使しつつ唾棄物出現の構造を記述するクリステヴァは、最終的に近代性のなかで「聖なるもの」を開示するセリヌの現代文学を「脱宗教的な宗教」として顕揚するのだが、そこで読まれることになる「聖なるもの」とはどのようなようにして生成するのだろうか。

クリステヴァによれば食物への嫌気が唾棄物のもっとも初歩的でもっとも古代的な形態であり、それは吐き気とともに主体的前に姿を現す。両親の欲望を記号化するこの食べ物に吐き気を催し、主体としての私(自我)からそれを嫌がる「私」(エス)が分裂する。しかし両親の欲望においてしか存在しない「私」にとってこの食べ物は「他者」ではないため、その代わ

りに私は私(超自我)を主体の外へと棄却する、「私」が私を位置づけるのと同じやり方で。この押しつけられた食べ物によって嘔吐させられることで私は死に私は「他者」になる。「私」が生成する過程において、嘔吐のなから私はあらためて自我を生み出す。唾棄物とは、つまり身体が内属している記号生成の場において自我の境界を画定するためにこのように現象する前対象的なものである。

また、クリステヴァは、唾棄すべきもの(abject)とは「原抑圧」(refoulement originaire)の対象であると言う。フロイトによればあらゆる「抑圧」が二次的な「防衛」の過程の一つであるのだが、こうした主体の原初的な「抑圧」の対象としてクリステヴァは唾棄すべきものを指定する。さらに彼女は、この「抑圧」(例えば宗教儀礼において穢れとしてある実体を排斥すること)によって唾棄すべきものを設定する作用そのものが、唾棄物を「聖なるもの」へと「昇華」(sublimation)させる必要条件になると言う。なぜなら「昇華」とは、前対象的なもの、超対象的なものを名づける可能性だからである。

それゆえに唾棄すべきものは主体にとって「固有||清潔なもの」(propre)を脅かすものであり、象徴的な体系(父性的なもの)が崩壊し自我という「固有||清潔なもの」の境界線が確固たるものでなくなる場合、主体は唾棄物(原初的に棄却された母性的なもの)に屈服する。クリステヴァの言い方によれば、内臓的な母胎のホラーに立ち向かい、ある「他者」と死を賭して取っ組み合わなければ主体の統合性は保たれないという

第13部会

ことになるだろう。

ところで、「身体的な中身の排出」という一連の振る舞いがクリステヴァの言う「ホラー」の様態であるとするならば、クリステヴァがここで参照しているフロイトの恐怖症の観察記録（「症例ハンス」）において、まさしくそのような振る舞いとして五歳児のハンスが「唾を吐く」という行為を強調することに注目して良い。ハンスは、母親のはいていないときの「黄色いパンツ」と「黒いパンツ」に「ペッ！」と言って唾を吐く。フロイトが「排泄物コンプレックス」と指摘するこの行為は、まさしく唾棄物の現前の生きられた現場として再考に値するものであると思われる。ハンスの分析症例において読まれるこうした主体のドラマについての考察は、書かれた唾棄物は感情体験として読みうるのかという問いを私たちに突きつける。これはクリステヴァが「聖なるもの」を書くとする現代文学からそれを読みうるかどうかという問いとまったく同型的なものである。

「心理臨床科学」の宗教

——故河合隼雄のへかたり——

戸田 游晏

筆者はこれまで、認定資格「臨床心理士」を中核とする心理療法実践・研究者の最大組織体日本心理臨床学会の動向に、類

宗教事象としての枠づけを試みてきた。

「心理臨床科学」は、「臨床心理士」の職能の根幹となる方法論とされている。

本稿は、心理臨床と宗教との関係の再考を目指し、心理臨床学躍進期の立役者でおそらく日本で最も著名な「臨床心理士」河合隼雄（一九二八—二〇〇七）の著作を読み解く。

河合隼雄は、八〇年代前半から世間の注目を集めはじめ、彼の提唱する「臨床心理学」「心理療法」が広く知られるようになった。八二年に日本臨床心理学会を離脱した河合らは日本心理臨床学会を設立したが、同年に岩波より刊行の『昔話と日本人の心』の第九回大佛次郎賞受賞をはじめ心理療法の有効性を宣伝する大衆への啓蒙はマスメディアを通じ人気を博した。これらの活動が、八九年の「臨床心理士」認定資格化に大いに貢献した。

当時日本にもニューサイエンスの思潮が上陸し、科学の発達と「精神世界」との折り合いに関わる議論も高まっていた。その一方で政府は科学技術立国を謳い、八五年には国際科学技術博覧会が開催された。また、新宗教・新々宗教が、大学という諸科学を教授する機関の中に布教の場を拡げはじめていた。オウム真理教の発祥と展開もこの頃にあたる。

日本心理臨床学会とオウム真理教団の共通項を、敢えて言挙げするなら、心理(学)主義に基づき存立する点と言えよう。

八六年の『宗教と科学の接点』で河合は、「心理療法」は「広義の科学」であり「広義の宗教」でもあると述べる。論文「精神療法の深さ」では、心理臨床は医療領域を侵犯しないよ